

# 兵庫県現代詩協会 会報46号

2019年12月1日発行 詩里二郎

## 2019年度ふれあいの祭典詩のフェスタひょうご 「詩の森に出かけよう」 盛会のうちに終わる

十月六日ラッセホール・リリーにおいて「詩のフェスタひょうご」を開催。午後一時三十分詩里二郎会長の開会挨拶で始まり、皆さまの協力と県や芸術文化協会の支援に感謝の言葉が述べられた。

第一部は司会丸田礼子より講師紹介があり、池井昌樹氏の講演が行われた。池井氏は演題「詩と私」についてゆつくり一語一語噛みしめるように話された。なぜ詩を書くようになったのか、なぜ詩は生まれるのか。幼少期から現在に至る詩の歩みについて語り、飾りのない口調で詩の本質に迫り、聴衆を魅了した。マイクの音量もよく内容が聞きやすいと好評であった。

第二部は自作詩朗読会で司会大橋愛由等のテンポの良い進行で14名の朗読者が紹介された。次々と壇上で詩が朗読され、それぞれの思いが吐露された。イメージが広がり詩の森に引き込まれ、詩の森で楽しむことができた。最後に神田さよ副会長の閉会挨拶で午後四時三十分終了した。

会場の外では芸術文化活動支援の募金箱が置かれ、書

籍販売もあり、池井氏の詩集を求める人も多かった。その後「池井氏を囲む」懇親会が隣のパンジーの間で行われ、交流に有意義なひと時を過ごすこともできた。

\*自作詩朗読者／李沙英・一瀉千里・いちかわかずみ

小田涼子・香山雅代・北岡武司・斎藤恵子・坂本久刀

高木敏克・田島廣子・永井ますみ・中嶋康雄・藤井雅人

野中美千代（敬称略）以上14名

\*詩のフェスタ参加者数 91名（内会員55名）

\*懇親会参加者数 32名

終了後アンケートを回収したが大変良かった、良かったを合わせると98パーセントに上る。どんなところが評価されたかは、詩の原点に触れるもの、詩に誠実に向き合う姿、詩ができる不思議・感動を取り出すことに納得、詩は難しいと思っていたが、決してそうではなく分かり易いと思った、詩作の参考になった、次回も期待したい、など多くの肯定的な感想・意見が寄せられた。良くなかったという否定的な意見は0だった。県内にとどまらず県外からも23名の方々の参加があった。

（報告 山本真弓）



## ■講演『詩と私』を聴く 佐伯圭子

既に十九冊もの詩集を持つ詩人池井昌樹の講演は、風鈴の音色から始まった。この不思議な講演の始まりで、一九五三年生まれの詩人は何を伝えたかったのだろうか。ただ単に、生まれ故郷香川県坂出の自然を懐かしむ心を伝えると言うより、詩人の詩作の根幹をなすものの表出であると思う。ひとの心から失われつつある自然と人間の関わりに警鐘を鳴らしたかったのではないかと、と筆者は思いつつ、時にユーモアを交えた講演を傾聴した。

漁業と林業の町坂出の田畑の中の一軒家で、曾祖母祖父母などを交えた十人家族の大切な長男として育った詩人は、縁側で鳴る風鈴とともに自然に親しんだという。そして上京する時に生家の縁側から連れ去ってきたと言う風鈴は、いつもこの詩人の傍らにあり折に触れ鳴らされているらしい。

詩人は十三歳の時、詩を作った、という意識もなく、詩を生み落としたのだと言う。

ふと家で見えた週刊新潮の表紙で谷内六郎の画に惹かれ、感涙する。表紙を次々切り取って学業そつちのけで大学ノートに貼り付け、自身の質朴だが温もりを充ちた生活と画を重ね合わせる。やがてそこから詩に誘(いざな)われ、投稿も始めて、山本太郎の選で入選や特選を重ねる。山本太郎は選者として最大級の賛辞を記している。概ね次のような評をしている。「作者独特の驕りの多い、粘液質な詩は才能としか言いようのないものである。」「若くして認められた池井昌樹はやがて大学に入学して上京し、弱冠十九歳で『歷程』同人となる。会田綱雄、草野心平とも会い見(ま)みえ、詩人曰く「焰を囲んだ原始人」との交流の中で詩作に熱中していく。卒業して就職しても詩作三昧で退職を余儀無くされ、一時故郷に戻るも再び上京する。

講演の間、詩人は度々、何の足しにもならない、何の役にも立たない詩を何故書くのか、と問い、偏(ひと)こに書きたいからだ、と自答する。そしてひとはそれぞれ心に神を持つていて、いみじくも時里二郎会長の言葉が示す通り「ひらがなのまどろみ」の中で、詩の神に祈りながら詩を作っているに違いないと思う。

講演の中で、詩人は幾つかの自作詩を朗読している。「祭りの匂い」他、匂いの詩二篇。最後にふれられた詩は詩集『黒いサンタクロース』より「手から、手へ」。長い作品だが、一部引用してみたい。

「まだあどけないえがおにむかつて／やさしいちちと／やさしいはとは／うちあけようもないのだけれど／いまはにおやかなその頬が瘦(こ)け／その澄んだ瞳(め)の凍りつく日がおとずれても／怯んではならぬ／憎んではならぬ／悔いてはならぬ／やさしい子らよ／おぼえておおき／やさしさは／このちちよりも／このはよりもとおくから／受け継がれてきた／ちまみれなばとんなのだから／わたすときがくるまでは／けつしてばなしではならぬ」六十行ほどの詩の中盤の数十行である。私のありふれた言葉で感想を述べるのは控えるが、これらの詩の言葉はどこから生まれてくるのか。山本太郎に絶大な評価を受けた匂いの詩に既に片鱗が見られるが、池井昌樹は古い箒笥や畳から漂って来る儼や因縁の匂いに惹かれてしまう敏感さを身に纏っているとしか言いようがない。ひらがなのやわらかさは時に粘着性と哀切を併せ持つて読者に迫ってくる。妻、息子など身近なひとを見ながら、同時に視線を遠くへ向けることが出来る詩人だと言える。視線は過去へ未来へ馳せて、いのちがときめく言葉を詩人はこれからも追及していくのだと思う。



## 第9回 Poem & Art Collection

2020年1月16日(木) ~ 1月21日(火) 15時まで

期間中 平日10時~17時(土・日は9時から17時 最終日は15時まで)

会場 神戸文学館 〒657-0838 神戸市灘区王子町 3-1-2 Tel 078-882-2028

主催 兵庫県現代詩協会 神戸文学館

☆ポエム&アートコレクション会員による詩・アート作品(絵画、書、オブジェ等の展示)

☆兵庫・詩の現在展(会員の詩集・詩誌展示)本年度も多くの優れた詩集・作品集が出版されています。

☆特別交流イベント(2020年1月18日(土)14時~15時)講演「詩を書くということ」

講師の時里二郎(ときざと・じろう、1952年-)は兵庫県出身の詩人。詩集『名井島』で今年(2019年)高見順賞、読売文学賞を連続受賞、めでたさの名残未だ冷めやらず。以前には1991年、『星痕を巡る七つの異文』で富田碎花賞、1996年、『ジパング』で晩翠賞、2004年に『翅の伝記』で現代詩人賞を受賞。めざましい詩集を次々に発表する一方、神戸新聞「読者文芸欄」の選者・評者を長年勤める。今回、「詩を書くということ」と題して語る。

主催 兵庫県現代詩協会 神戸文学館、後援 日本現代詩人会 半どんの会

## 第7回 文学紀行 <姫路文学館・姫路城周辺をぶらり歩き>

世界遺産姫路城周辺に位置する姫路文学館、兵庫県立歴史博物館、そして文学碑をぶらり歩きで巡ります。世界的建築家・安藤忠雄建築も見所の姫路文学館では、『企画展 生誕120年記念 俳人永田耕衣展』を展覧。そして兵庫県立歴史博物館では、『スケッチでたどる兵庫の建築と景観』を鑑賞します。姫路城を西側・北側・東側から眺望できます。定番の正面南側から観る姫路城もぶらり歩きで一味違った趣があります。

会員の方も、会員以外の方もどうぞふるってご参加ください。

2020年3月15日(日) 雨天決行

◎集合10時 JR姫路駅中央改札口

終着13:30 おもてなしダイニング福亭(和食)にて昼食後に解散

解散後は個々で姫路城登城や播磨国総社の大塚透文学碑を訪ねることも可能

◎参加費 2,500円(福亭での昼食代、文学館・博物館の観覧料も含む。途中のバス代は個人負担)

◎ナビゲーター・大西隆志

※行程※

⇒10:00 JR姫路駅中央改札口集合⇒姫路駅北口神姫バス停⇒市之橋文学館前下車⇒姫路文学館

※姫路文学館・俳人永田耕衣展は、平成7年阪神淡路大震災で全壊した神戸須磨区の耕衣居から救出された5千点をこえる資料を保存する姫路文学館が、その後の研究の成果を踏まえた選りすぐりの逸品と、新たにご遺族や関係者所蔵の資料、さらに新たに発見された資料も一堂に公開されています。「俳哲」耕衣との「出会いの絶景」を楽しんでもらえたらと思っています。詩人との交遊も貴重です。

⇒11:40 姫路文学館出発⇒阿部知二文学碑等(徒歩)⇒12:00 兵庫県立歴史博物館

※県立歴史博物館・スケッチでたどる…展では、兵庫の古民家や町並みなどを水彩や油彩などで描いた内海敏夫、近代建築などをペン画で描いた沢田伸。古き良き兵庫の風景を楽しめます。

⇒13:00 バス又は徒歩で福亭へ(昼食)⇒13:30 福亭

◎参加申し込み 46号会報に同封の葉書【私製】に切手を貼って申込をしてください。

※締め切り 3月5日(木)

文学紀行担当・大西隆志 〒670-0061 姫路市西今宿 3-1-9-702

### ■第一六回読書会報告

#### 田村周平氏『池井昌樹の詩を読む』牧田榮子

豊かな深い森の在り処を知らされた読書会だった。

若いころに出合い、その後友人となるふたりが暮らした東京から語り始めた。池井昌樹は坂出市を故郷とする。一方赤穂から上京した田村周平は馴染みの喫茶店や居酒屋があつた。そこで知人の仲介で知り合ったという。年齢も同年。このあたりのことを田村は、池井の詩に惹かれたというよりも、巷で発行されている詩誌や詩集を知人や仲間たちと読み合い朗読する活動が楽しかったのだと話す。やがて夜中でも電話が鳴り「どうだ、いいだろう」とばかり自作の作品を聞かせてくれるが、酒に酔っていたり詩が長くかつたりと、いやはやと言いなながらもここにことごとげ話を披露し笑いを誘った。

池井昌樹は谷内六郎の絵に惹かれる少年だった。十二歳で詩を生涯書く決意をする。山本太郎選により「雨の日のたたみ」が全国学芸コンクール詩部門特選となる。一連二七行。「〱〱〱暗いにおい〱〱〱古い宿屋の箱膳におい〱〱〱田んぼのおう水に流された〱〱〱かえるの鳴く声が〱〱〱麻のゆかたを〱〱〱かびのおいにしめらす〱〱〱たんすの引き出しの〱〱〱古いうめきが〱〱〱じつとりと聞こえて来る〱〱〱雨の日のたたみの室〱〱〱色あせた紙風船が〱〱〱何でもないように〱〱〱ぱつぱりとこぼるがっている」(部分)

これをきっかけに一九七一年上京し、すぐ「歷程」同人となり会田綱雄、鈴木翁一らの知遇を得ている。そのスピードある行動は詩の力が引き寄せたのだろう。一九七七年には第一詩集『理科系の路地まで』として発表された。やがて一九九七年藤村記念歴史賞、芸術選奨文部大臣新人賞『晴夜』と続く。その中の「星々」は一連七六行。「むすこよおぼえておりますか……」と、池井昌樹とうちゃんはずかしく語りかける。「おほいほい おおほいほい」の合いの手に揺られる年月をたゆとうように詩のこども

は美しい少年になっていく。山本太郎はこの詩を読んで「天才詩人が一所懸命に詩を書いて、結婚してこどもができて、別の大きな歴史に組み込まれていく恍惚と不安を感じた」とヴェルレーヌの詩の一節を挙げて讚えた、と田村は語った。「いきているのかもしれないー『晴夜』後記に代えて」ではその作風に巡り合う時期がさらりと書かれ、興味をくすぐられた。

また那珂太郎「池井昌樹『晴夜』を推すー第五回萩原朔太郎賞選評」のなかの末尾「おぼそ強く訴える思想を欠いた技法や、描写や、抒情は、嫌りない」との一文は池井昌樹の詩を読者に更に近くする。天沢退二郎「詩の旅か詩人の旅かー池井昌樹の作品に沿って」(現代詩文庫164『池井昌樹詩集』)を読む田村の淡々とした声が導くように、喚起するように、行間を掘り起こしていく。徐々に避けていた深淵にむかっている。個性的な詩の調べに天沢退二郎の伴奏が加わる感じた。文中「詩人は、詩を書きながら、その詩と同じところに、一緒にいるーこれが池井昌樹の(かれだけと限りはしないが)詩の危ういところであり、魅力の所為でもあるところだ。」ではドキツとして、つい朗読の声に置いて行かれそうになった。池井昌樹とは親交があり心酔していたという会田綱雄の詩「伝説」の朗読。そこにさりげなく言い添える蟹のエピソード。合間に挟むこうした話も、親しい田村が語ることで生々しく伝わる。

丹念な詩の朗読に田村の云わんとすることが見える。資料は道筋に沿って置かれ、省略せずなぞることが重要だったのだ。友人田村をとおして池井昌樹が姿を現した。そこが田村の導線だったのだと気がつく。友でござるの前に出ていない。しみじみとした読後感。問い返されている。現代詩に毒されていないという池井昌樹をもっと読みたくなる。詩のリズムや抒情はどのようにして生まれ、魅力的なスタイルにたどり着きつけは何かだったのか。秋の「詩のフェスタひょうご」に来神の折りにはそこをぜひ、と期待は膨らむ。

## ■ 関西詩人協会 & 兵庫県現代詩協会交流会 「詩で開こう」とばと未来」

8月17日(土) 13時30分より、西宮市市民会館大会議室において、関西詩人協会との交流会を開催した。当日は厳しい暑さであったが、広い会場は参加者でいっぱいになった。

関西詩人協会代表左子真由美さん、兵庫県現代詩協会会長時里二郎の挨拶の後、自作詩朗読が行われた。江口節(兵庫)、村上うさぎ(関西)、北岡武司(兵庫)、山川方子(関西)、黒田ナオ(兵庫)、名古きよえ(関西)、時里二郎(兵庫)、熊井三郎(関西)計8名の方々。

その後、全員の自己紹介をし、いよいよメインプログラム、詩のフリーマーケットが始まった。自著、同人誌、を各自価格を定め販売した。著書や同人誌を巡り、会話も活発に弾んだ。

フリーマーケット中、一行詩をボードに書くようにしたが、たくさんの詩行は集まらないようだった。

アトラクションでは、松原さおりさん『風鐸』同人がピアノを演奏し、クラシックの曲に聴き入った。次に福永祥子さんの仲間ロックンローヴァーによる人形劇が披露された。「鬼のパンツ」、「チェッコリー」など童心に帰って楽しんだ。閉会の挨拶を山本眞弓事務局長が述べ、全員の記念写真を撮り幕を閉じた。

初めての企画ではあったが、賑やかな交流の場となり、目的を達したと思う。関西詩人協会とこれからもこのような場を持ちたいという意見が出た。

終了後、懇親会を隣接する職員会館「くすのき」で行った。

\*兵庫県現代詩協会参加者(関西詩人協会参加者数33名) 芦田はるみ、相野優子、阿部由子、猪谷美知子、内田正美、江口節、以倉紘平、岩崎英世、亀井眞知子、香山雅代、神田さよ、季村敏夫、和比古、北岡武司、黒田ナオ、

坂本久刀、在間洋子、野口幸雄、高木敏克、玉川侑香、高橋富美子、田中信爾、張華、時里二郎、福永祥子、山下寛、牧田榮子、山本眞弓、塩谷涼子、ロックンローヴァーの皆様。以上35名

\*兵庫県現代詩協会参加詩誌

『アリゼ』、『風の音』、『時刻表』、『多島海』、『鶴鶴』、『現代詩神戸』、『ターミナル』、『イリプス』、『河口から』、『軸』、『Mesie』、『つるかまら』、『メランジュ』、『ア・テンボ』、『プラタナス』、『ロシア』、『木想』。以上17誌

\*懇親会参加者数 関西詩人協会19名、兵庫県現代詩協会13名 (報告 神田さよ)



## ● 会員の詩集評 時里二郎

● 中嶋康雄『うそっぱちかもしれないが』（藩標）2019年6月刊。『ブランクトンしかない家にも』（まろうど社）同年8月刊。中嶋さんがたて続けに2冊の詩集を上梓なさった。これが第1詩集と第2詩集ということになる。中嶋さんの、このユニークな詩のスタイルは、だれもまねできない。ひとつは、不条理な筋立てのエピソードの魅力。「粉飾された会社では／粉飾された距離が踊っている／給料は薄っぺらだが／頭が粉飾されているので／ここにこしている／ここにこしているだけでは／どこも食べ物を売ってくれないので／痩せているかと思いきや／ぶくぶく肥っているのは／だまされているからだ（以下略）」（「粉飾」）こんな調子で、ありふれた日常語を使って繰り広げられるナンセンスの世界は、行から行へ、ある言葉（ここでは「粉飾」）をイメージのボールのように次々と展開させていって、そこから自然に湧き上がる言葉のリズムが、詩を動かしていく。あくまでも何かの寓意ではない。その筋立てのナンセンスに潜む不快感と不条理の世界は、語られるうちに、それ自体が現実の世界を食い破って、自律した言葉の世界としてさしだされていることに気づく。ナメクジやクラゲや蛭や虫といった不定形で捉えどころのない生き物や、まがまがしいものや、ぬめぬめしたものやがさかんに出てくるが、それは中嶋さんがこの社会で生きていることの無意識な実感から出ているのかもしれない。次々に繰り出されるオノマトペに頼るところが少し気になるが、第2詩集は、格段に詩の世界を広げ、普遍的な世界への通路を切り開きつつあるように思いました。

● 坂本久刀『時鳥啼く』（藩標）2019年7月刊。詩を書くよるこびに満ちあふれた好詩集。退職なさってから充実した生活が、決して声高にならず、しずかに淡々と語られるのだが、そこにあふれているのは、生きることの

よろこび、こんなに向日性に満ちた人生は、読んでいてうらやましくなる。それも虚飾のないすなおな言葉のひとつひとつが、詩のリズムをつくって、読む者をあたたかい気持ちにさせる。ことに、第2章に故郷オホツクの村での生活を回想する詩群は、詩集に奥行をもたらし、現在の心象を静かに語った第3章の人生の感慨をいっそう深いものにしていく。「葉が／舞い落ち／枯れた／落葉樹林／踏めば／乾燥した空気の中／ほきほき／小気味よい音／もたれてくる枯れ木には／温みがある／春には小鳥が囀る木に変わる／希望を持って／地中で準備に余念がない／風止んで／影が正しくなる／人生は／いつもこれからだよ／光がつきささり／枯淡な味わいの／枯木立の／声だ」（「枯木立」全編）。こうした作品を読みながら、ふと、お仕事をなさっていた頃のことを題材になさった詩はお書きになっているのだろうかと思いました。ぜひそのころのことを書いた詩も読んでみたい気がします。

● 季村敏夫編『一九三〇年代モダンニズム詩集』（みずのわ出版）2019年8月刊。季村さんの神戸モダンニズムの検証は、2009の『山上の蜘蛛——神戸モダンニズムと海都市ノート』に始まる。もう既に10年に及ぶ。本書では特に1930年代（昭和5年～15年）、つまり神戸詩人事件（昭和15年）前後の、官憲による言語弾圧がきびしくなる時代に生きた3人の詩人の詩集が収録してある。矢向季子（1914年～没年不詳）、隼橋登美子（生年不詳～1940年）、冬澤弦（生没年不詳）。3人とも、季村さんがここ10年以上にわたって渉猟し、発掘してきた、主に当時の同人誌のなかから浮かび上がってきた詩人たちである。生前に3人とも生前には詩集を残していない。季村さんが、彼らの詩を拾い集め、彼らの詩集として編纂しているのだ。この本には、それこそおびただしい数の同人誌が記されている。ほとんどが無名の、歴史の分厚い時間のなかで消え去ってもおかしくないような詩誌である。それらを丹念に読み込み、無名の詩人たちの、詩にたいす

る執着の息づかいを拾い上げる。さらに共時的な当時の詩の世界や文学的世界の中に位置づけることも忘れない、その手際に見られる忍耐強い、まるで使命感に突き動かされているような季村さんのモダンニズム検証の動機は何処にあるのだろうか。一つは、神戸モダンニズムといえば、竹中郁ら、海港詩人倶楽部の、垢抜けて洗練された作品世界と思われていることへの違和感。つまり、彼らとは別に、官憲の言語弾圧の時代の空気の中で無骨に詩を求めていった多くの無名の詩人たちの一群が確かに存在していたことを検証しなければならぬという動機があったに違いない。そして、もう一つ、動機を上げるとすれば、60年代後半の学生運動当時の彼自身の記憶の痛みが、まるで通奏低音のように、1930年代を生きた多くの無名詩人たちの足取りを追う季村さんの息づかいのなかに感じられることをあげておきたい。言い忘れるところだったが、神戸詩人事件についての季村さんのスタンスについても書いておきたいのだが、多くをとりすぎるので、書かないが、彼は決して結論的な総括はしない、それはなぜなのか、ぜひ本書に直接あたって考えてみてください。

● 安水稔和『辿る 続地名抄』（編集工房ノア）2019年9月刊。単独の詩集としては25冊目の詩集。昨年の1月に『地名抄』を上梓なさったばかり。しかも260ページにもなるのかという本詩集には101編の詩が収められている。前詩集のあとがきに「地名とは、過去の痕跡、記憶の堆積。現在の意識、いのちの発語。未来の標識、予感の音叉。（略）」とあるのをもう一度思い出しておこう。また、今回の詩集のあとがきによれば、初期の『能登』以来、地名を題とした詩編は500編にも及ぶという。むしろ、そのように地名に深い思い入れ抱き、詩のテーマとしてかくも執着なさるのは、安水さんのライフワークでもある菅江真澄の旅を辿る営為に由来するのだが、さらに踏み込んで言えば、地名というものが、詩が扱ってた言葉の古層に深くかかわり、人の生の営みの全体をふくん

だ記憶の宇宙であるとも言える。安水さんの詩のもう一つのモチーフでもある《記憶》の原型的な世界に強く触れている言葉の世界が地名であるとも言える。今回深く印象に残ったのは最終章に収められた「父の村」「母の村」のなかの「仁豊野」と「子犬丸」の連作である。真澄の旅の果てに、安水さんは父母の土地の名に行き着いたという感慨。そこに自らの生の源を改めて確かめておられるような気がする。「子犬丸\*」からその後半部を引く「赤土の崖曲がって／道は続く。／ひがしむら なかだにだんよ／さみず うるすべ おくらうち。／次々とあらわれる／なつかしい小集落。／あたたかい土塀に／ツメキリソウの咲く。」

●相野優子『びかびかにかたづいた台所になど』相野優子（ふらんす堂）2019年10月刊。

新しく本会に入られた相野さんの5年ほど前の詩集です。彼女の作品のなかに入り込むと、時間が止まっているのに気づく。じつにこまやかな手際で語られることがらが、止まった時間のなかで、おだやかな慈しみのひかりのような世界に包まれている。「訪う人はささやかでももてなす／季節の野菜や魚に塩をする 酔につける／古くなつたあまりものに火を入れる／ごみにするときには必ずかなしむ」表題作から引いたが、彼女の日常の眼差しから、身のまわりの人にかぎらず、世界に生きている人たちへもそそがれる心は、他者に寄り添うということ。寄り添うことが、相手にごく自然に受け入れられるようにすること、それが「もてなす」ということの意味なのだろう。詩の言葉の肺活量とでもいうのだろうか、息継ぎをしない、でもゆたかな語りの時間がおおらかに、読む人を包み込むように流れていく。



## ■詩のフェスタひょうご朗読詩集より

### 朝のうた

野中美千代

青空に きらめく朝の雲  
流れゆく その風を追い  
儂げに たゆたう花の香に  
帰り来ぬ日々を 想う  
今あなたと この世界を  
愛し、歩み、そして微笑み  
遙か遠い あなたの未来を  
そっと 灯していたい

有明に 清けし朝の露

消え落ちる その影を追い

切なさに 彷徨う我が心

葉漏れ日の光 抱く

今あなたと この世界を

巡り、語り、そして寄り添い

ただあなたの 満ちゆく未来の

ひと滴で ありたい

今あなたと この世界を

ともに歩み、そして微笑み

ただあなたの 満ちゆく未来の

ひと滴で ありたい

### ひめ（寵姫）

李沙英

「どこにいったのかな・・・」

捜しているのは

あなたの逃した小鳥なら

私が捕まえておきました

くるくる宙を舞って落ちていたので

わたしがひらっておきました

あなたが育てた小鳥です

あなたが慈しみ手におかけて育てた

可愛い可愛い小鳥です

今は私の籠の中

その時を待っています

このまま夕餉の膳にくわえましょう

焼き鳥にしましょうか

それとも竜田揚げにしましょうか

あなたが育てた小鳥です

あなたの手の中から逃げ出した

あなたの可愛い小鳥です

今は私の籠の中

声を上げず身をもたげ

羽を丸めて眠っています

あなたが撫でた金色の羽毛を蓄え

つぶらな瞳にはもう光を見ることもなく瞑られたままで

小さく薄いくちばしから奏でられる

あなたへの愛に満ちた調べは

もう語られることもなく

在りし日の夢に馳せながら

安らかに籠の中で眠っています

もうあなたを呼ぶこともありません。

## ■常任理事会報告

◇五月二十五日第一回常任理事会・私学会館にて。常任理事十一人名出席\*総会報告。協会会則第一条の改正案可決。新役員の承認\*年間事業について検討\*関西詩人協会との交流会について、詳細討議\*第一回読書会は七月二十七日（土）私学会館にて。「池井昌樹の詩」チューターは田村周平\*「ポエム&アートコレクション」

ン展」二〇二〇年一月十六日～二十一日神戸文学館を予定\*文学紀行は姫路市書写山及び姫路文学館「司馬遼太郎展」見学などを企画。二〇二〇年三月二十二日(日) 予定\*現在会員数は百三十五名。

◇七月六日第二回常任理事会・私学会館にて。常任理事十二名出席\*会報四十五号は発行送付済み\*関西詩人協会との交流会。八月十七日(日) 十三時三十分から西宮市民会館大会議室にて、申込み〆切りは七月三十一日\*ポエム&アートコレクション、搬入・搬出日決定。講演は時里二郎氏に依頼\*「詩のフェスタひょうご」実行委員会名簿及び役割分担の確認。県との委託契約、パンフレットの構成及び配布について。会計より必要経費についての説明。

◇九月十四日第三回常任理事会・私学会館にて。常任理事十名出席\*関西詩人協会との交流会報告。出席者は六十八名。参加同人誌二十九誌。予想を上回る(参加で概ね好評だった。後日両協会担当者で反省会を開催。次回以降の継続を期待\*第一回読書会「池井昌樹」参加者は二十七名、「詩のフェスタ」に向けての勉強会になった。第二回は十一月三十日(土) 神戸市教育会館にて十三時より、「辻征夫の詩」チューターは時里二郎。参加申し込み〆切りは十一月二十日。往復葉書で案内\*「ポエム&アートコレクション」講演は時里二郎氏「詩を書くということ」二〇二〇年一月十八日(土) 十三時より。チラシ及びポスターは作成中\*文学紀行。二〇二〇年三月十五日(日) 雨天決行。書写山ロープウェイが冬季休業のため一部日程変更。姫路文学館と県立博物館を見学後、姫路街歩き。十五時解散\*ホームページを更新。メールで行事参加者を募集。効果が出ている。

◇十一月四日第四回常任理事会 私学会館にて。常任理事八名出席。八・九月会計報告、及び関西詩人協会との交流会会計報告。次回読書会について。十一月三十日、チューター時里二郎。ポエム&アートコレクションに

ついて。二〇二〇年一月十六日～二十一日。チラシ検討。展示出品者が少ないため、参加を呼びかける。作品タイトルを確認する。期間中、講演時里二郎。レジュメなどの確認。文学紀行二〇二〇年三月十五日。下見の結果、姫路駅中央改札口十時集合。姫路文学館、兵庫県立歴史博物館、昼食後解散。会費二五〇〇円。申込締め切り三月五日。ホームページ、今後の協会行事を更新。ホームページに載せる会員のエッセイ、評論を募集している。(報告) 尾崎美紀・神田さよ

### ■来年度の総会予告

二〇二〇年五月六日(水) 十三時三十分。ラッセホール。

### ■他団体会報・詩書 (2019年6月～10月)

すずかけ6・7・8・9・10月号(兵庫県芸術文化協会)  
 岩手県詩人クラブ会報第94号(東野正)  
 長野県詩人協会会報141号(内川美徳)  
 いしかわ詩人会報第48号(米村晋)  
 兵庫県歌人クラブ会報第201号(安藤直彦)  
 群馬県詩人クラブ会報310・311(堀江泰壽)  
 山梨県詩人会詩のサロンやまなし(こまつかん)  
 福岡県詩人会報174(脇川郁也)  
 日本詩人クラブ詩界通信87号・88号(北岡淳子)  
 宮城県詩人会報第29号(竹内英典)  
 関西詩人協会会報第94号・95号(左古真由美)  
 大分県詩人協会会報154(井手口良一)  
 中日詩人会報195・196(古賀大助)  
 日本現代詩人会報155(秋亜綺羅)  
 茨城県詩人協会会報28(裕杏子)  
 秋田県現代詩人協会会報(吉田慶子)  
 宮城県詩の会会報44号(谷元益男)  
 福島県現代詩人会報第121号(斎藤真)  
 中四国詩人会ニューズレター第46号(岡隆夫)

福井県詩人懇話会会報101(渡辺本爾)  
 岐阜県詩人会会報第13号(頼圭二郎)  
 埼玉詩人会会報第90号(北畑光男)  
 岡山県詩人協会だより27(斎藤恵子)  
 高知詩の会通信21号(長尾彰)

鳥取県現代詩時協協会会報第40号(手川小四郎)  
 三重県詩人集vol.27(三重県詩人クラブ)  
 栃木県現代詩年鑑2019年版(栃木県現代詩人会)  
 2019季刊詩集(徳島現代詩協会)  
 西宮文芸誌第28号表情(西宮芸術文化協会)  
 角第51号(角の会 金田)

みやぎ民俗第71号民俗学と現代詩(亀澤克憲)  
 フアントム4号(為平濤)  
 p0秋174号(左古真由美)  
 モデラート49(岡崎葉)  
 年刊ふくい2019・35集(福井県詩人懇話会)  
 『自然生死』(山田清吾)  
 『母の二重奏』(市原悦子)  
 いわたの詩2019(岩手県詩人クラブ)

### ■会員の発行書 (2019年6月～10月)

安水稔和『迎るー続地名抄』編集工房ノア  
 季村敏夫『一九三〇年代モダニズム詩集』みずのわ出版  
 中嶋康雄『うそっぱちかもしれないが』濛標  
 中嶋康雄『プランクトン』しかいない家にも』濛標  
 坂本久刀『時鳥啼く』濛標

### ■会員の詩誌 (2019年～10月)

おたくさ目ー2(鈴木猷)  
 RIVIERE165・166(永井ますみ)  
 現代詩神戸265・266(永井ますみ)  
 鳥76号(足立勝歳)  
 鳶が城便り101号(足立勝歳)  
 EDGING43・44(寺田操)

時刻表第5号・第6号(たかとう匡子)  
ア・テンポvol.1・55(玉井洋子)  
鶴鶴12(江口節)  
プラタナスvol.1・65(玉川侑香)  
別嬢109(高橋夏男)

## ■会員の動静

今村欣史(詩) 2019年度半ドンの会文化賞受賞  
北岡武司(詩) 2019年度半ドンの会文化賞受賞  
たかとう匡子講演「姫路空襲から平和を考える」

7月2日(於)姫路市立山陽中学校

坂本久刀詩集『時鳥啼く』の出版記念会

8月25日(於)ハナワググリ

大橋愛由等「ことばとフォークソング」

11月4日(於)カルメン

大西隆志「ひとつ山こえてみようか会」

11月9日(於)姫路市立図書館千分館

第28回西宮市野外文化事業「野外アートフェスティバル」小学生の詩・書と絵のパーフォーマンス 10月18(20日)朝倉裕子・芦田はるみ・和比古・香山雅代・神田さよ・佐伯圭子・佐野博美・中川道子・春名純子・坂東里美・望月逸子・山下輝代

## ■イベント案内

「長谷川龍生、その詩と方法」

基調報告 倉橋健一・パネルディスカッション

2019年12月21日(土) 13時30分

神戸女子大学教育センター5F特別講堂

申込先 今野和代 FAX 06-63338157 96

## ■退会・逝去

長尾佳枝・山崎啓治(退会) 鳥巢郁美(逝去)

## ■入会 (50首順)

相野優子 1953年明石市生 再入会です。阪神淡路



大震災後の3か月後の『詩集・阪神淡路大震災』に参加し入会したものの家庭の事情で休みました。学生時代、詩学の投稿欄で一位に選出。嵯峨氏に師事。その後20年程休みありに入会。これからの時間を詩の中で育てたいと思います。日本現代詩人会 『詩誌アリゼ』同人 近江詩人会員 詩集1992年『夢の禁漁区』詩学社。2014年『ぴかぴかにかたづいた台所になど』ふるんす堂。〒655-0006 神戸市垂水区本多聞 9-10-29 多田方

TEL 09092702358 [la-vie-ena-rose1123@ezweb.ne.jp](mailto:la-vie-ena-rose1123@ezweb.ne.jp)

小田涼子 1946年香川県生 定年退職した60歳の



時、投稿した詩が新聞に掲載されたことをきっかけに、詩とかかわるようになりました。2012年詩人会議入会。2017年詩集「花を抱えて」を自費出版。〒655-0006 神戸市垂水区本多聞 7-21-28 塩

谷方 TEL 078-781-2229 [ryou1020@nike.eonet.ne.jp](mailto:ryou1020@nike.eonet.ne.jp)

## ■新入会員をご紹介ください

兵庫現代詩協会は詩に関する幅広い行動を行っており読書会や文学紀行などお互いの交流を図っています。詩を愛する集いの場として新たなつながりに参加希望の方を求めています。

入会申込 神田さよ TEL

079815310686



## ■会計より

今年度の会費を同封の振込用紙でお納めください。

なるべく速やかにお願いします。年会費は四千元です。  
振替口座 0092009111243

口座名 兵庫県現代詩協会

協力金 江口節 (報告:玉川侑香)

## ■事務局より

会員発行の著書・詩誌などの出版物は事務局へお送り下さい。詩に関するイベント情報の案内、会員の動静もお知らせください。連絡先 山本眞弓。

\*ホームページ <http://hyogopoetry.sakura.ne.jp/main/> の充実を図るためにエッセイ・評論の投稿もお待ちしております。

連絡先 北野和博 [soranohitoj@yahoo.co.jp](mailto:soranohitoj@yahoo.co.jp)

## ■訂正

\*会報45号 入会 法橋太郎 詩集追加および住所訂正  
詩集『永遠の塔』(2017年)

〒652-0005 神戸市兵庫区矢部町24-8-101

## \*名簿訂正

p12 高木敏克 TEL(正)078164717647

p13 帳章 (正)張華

## ■担当

兵庫現代詩協会事務局《山本眞弓》

〒651-0091 神戸市中央区若菜通6-4-15-203

TEL 078124113086

会計《玉川侑香》

〒652-0015 神戸市兵庫区下祇園町15-5

会報編集《和比古》

〒662-0084 西宮市樋之池町18-5

印刷《遊文舎》

〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-17-31